

研究ノート

オリンピックになる (1)
泉川寛晃氏 (近代五種) インタビュー

富田 幸祐 (中京大学)

本稿は近代五種でロサンゼルスオリンピック、ソウルオリンピックの2大会に出場した泉川寛晃氏へのインタビューをもとに構成されている。インタビューは2022年5月24日に実施した。本稿については脱稿後に、泉川氏に確認をもらい了解を得たものである。

【生年月日】

1957年12月20日 沖縄県出身

【経歴】

1970年3月 宮森小学校卒業

1973年3月 石川中学校卒業

1976年3月 沖縄県立石川高等学校卒業

1976年3月 陸上自衛隊入隊 (鹿児島県霧島市)

1977年4月 自衛隊体育学校入校 (近代五種班)

2011年12月 陸上自衛隊退官

2019年4月 NTC 競技別強化拠点 (近代五種) マネジメントスタッフ

【競技歴】

・野球

1975年8月 第75回全国高校野球選手権大会出場

・近代五種

1982年5月 東京国際大会 (優勝), 近代五種全日本選手権大会 (優勝)

1984年8月 第24回オリンピックロサンゼルス大会代表

1985年6月 東京国際大会 (優勝), 世界選手権大会 (メルボルン) 代表

1987年11月 近代五種全日本選手権大会 (優勝)

1988年8月 第25回オリンピックソウル大会代表

【指導者歴】

・近代五種

2002年～2004年 世界選手権大会監督

2002年9月 プサンアジア大会監督

1. 略歴について

泉川 よろしくお願ひします。

冨田 よろしくお願ひします。まずは自衛隊入隊までの泉川さんのご経歴についてお話しただければと思います。

泉川 高校まで沖縄に住んでいまして、小学校から高校まで野球をはじめ様々なスポーツを経験させていただきました。東京オリンピックのときは小学校1年だったのですが、小学校5年の時にはメキシコオリンピックを見て感動しました。東京オリンピックの円谷幸吉さん¹⁾、そしてメキシコオリンピックでは宇佐美さん²⁾なんですけど、そういう日本の選手が表彰台でメダルを掛けてもらっている姿を見て、こんな大会があるんだなということで、遊びの中でオリンピック大会ゴッコというのを、小学校5、6年生のころですが、低学年など集めて私が主催してやりました。これは面白いということもあり、野球ばかりじゃなくて走ったり、それから、海が近く砂浜でバック転をやったりとか、棒高跳び、高跳び、砂浜はクッションがあるんでいろんな種目が可能で楽しかったです。泳ぎは潜りぐらいなんですけど、そういう感じで、スポーツができる環境で育ってました。

父は米軍基地で働いていました。私が住んでいた石川にはビーチがあって、これはベトナム戦争に行ってる米軍の人たちの家族との団らんの場所なんですよ。水着を着て砂浜で泳いで遊んだりして。そこには娯楽施設があって、一つの小屋の中にグローブとかバレーボールとか、ゴルフのパットパットゴルフとかそういうのが置いてあって貸してくれるんですね。土曜日から日曜日、基地のあの人たち（米軍家族）がいないときに父親が遊びにおいでって誘ってくれて、兄弟みんなでパットパットゴルフとかをしていました。浜辺があるし、兄弟が多かったのでキャッチボールもできるし、いろんなスポーツが、バレーボールとかもできる

し。そういう感じでやったんで、環境的には運動できる環境だったんだなっていう感じでした。

その中でも野球を小中高とやっていて、高校の時にたまたま全島でも優秀なピッチャーがうちの高校に入ってきて、絶対甲子園に彼を連れて行こうと。そのためには他の8人や補欠入れて、チームが強くなると、うまくならないといけないということですね。何とか高校3年の最後の夏に沖縄県大会で優勝し、第57回全国高等学校選手権大会に出場することができました。初戦は開会式後の第3試合で、新潟商業高校に逆転勝ちし、続く2回戦では浜松商業に逆転サヨナラホームランを打たれ負けてしまい、高校最後の公式戦を終わりました。

最初の就職はこの経験がきっかけでした。地元石川高校の近くにある三和シャッター沖縄工場という所でした。そこに内定をもらったのですが、なんとというか内定もらったけど本当に入れるのになって心配だったんですね。そこに、自衛隊員の募集がありまして、同級生が私を誘ってくれたんです。同級生と共に自衛官募集事務所の広報官の自宅に行って、「君は自衛隊をどう思うかね？」と聞かれて、「なんか良さそうですね」と返事をしたところ、その広報官の方がすぐ募集事務所長に電話して、いい子がいるので試験を受けさせてもらえないかと連絡をしていました。それで身体検査や面接を受けて採用され、1カ月ぐらいで教育隊に入隊したのですが、父親もびっくりしてました。

冨田 陸上自衛隊入られたのは、友人の方からそういう話が出てとのことですが、それは沖縄でですか。

泉川 そうですね。沖縄の高校を卒業するときに、友達はもう入隊決まっていたので、たまたま私が三和シャッター内定だけど、まだ不安定な状況だったんです。はっきり採用っていうのがなかったんで。じゃあそのうちにどう？って言われて試験受

けたら、合格です、いついつ入隊式ですとか言われて準備がトントンって進んでいったもんだから、早いなと思って、じゃあそこにしますって。

どっちかという、私もちっちゃい所で、沖縄ってちっぽけな島じゃないですか。何とか大きな所で、日本とか、世界まで行きたいなという野望があったんで、できれば世界で戦いたいなみたいな。沖縄だけで人生終わるんじゃないで、もうちょっと視野を広くしたいっていうのもあったんで、ちょうどラッキーだったかなっていう。

三和シャッターは沖縄に工場があったんですよ。私の高校のすぐ近く、高台があるんですけど、そこに今もあるんですけど、私が高校在学中にできたのかな、大きな会社が、その会社に野球部です。野球部つくるんで、工場の仕事して、野球やってっていう。高校の野球部で甲子園も出て、そこで勤められれば沖縄で安定した仕事もらえると思ってたんです。この時、私、学校の先生から九州産業大学の話をいただいてもいました。でも、大学に進学するとお金もかかるし、父親だけで母親いなかったんで、弟2人と私と父親で、4人でしばらく生活してて、姉たちはみんな結婚したり独立したりで、早めに就職して親には負担かけないで、何とか自立して早めに就職しようかなと思っていて、それで自衛隊の話があった。そしたら衣食住はタダだし、いろんなところでメリットがあったんで、じゃあそっちにしよう。思っているうちに約35年の定年まで勤務をすることができました。

富田 いまお話に出たんですけども、家族構成についてお聞きしてもよろしいですか。

泉川 まず母親が33で亡くなったんですけど、それで、私の上に、長女、次女、三女、3人。私が長男、弟が2人で6人兄弟です。1人だけ東京で結婚している姉(次女)がおります。今、江戸川に住んで、その姉と私が関東に出てきて、あとは長女、三女、次男、三男が沖縄で生活してま

すね。

うちはあんまり裕福じゃなく、貧しかったんで、土地だけ借りて、うちの父親は大工だったのでそこにドンと家を建ててくれて。で、われわれみんな大人になり離れていったんで、そこは現在地主さんが管理しており家族全員それぞれの場所に移りました。だから固定がないんですよ。みんな各々で生活してるので寂しいです。本来、長男である私が地元でドンと土地を買って家を建てれば一番良かったんだけど、こっち(埼玉)に出てきたものですから。

住んでいたのは今のうるま市。うるま市の石川っていう所なんです。石川中学、石川高校って野球のメッカだったんですよ。私が甲子園出た時が初出場ですね。それから1989(平成元)年、第71回全国高等学校選手権大会に後輩が2回目の出場を果たしています。それ以降は出ていません。小学校は宮森小学校です。ここには1959年(昭和34年)6月30日に訓練中の米軍ジェット機が墜落したところとして地元では有名です。私がまだ2歳のころでした。毎年ニュースで報じられています。慰霊碑も建ってて、うちの姉とかはちょうど小学生だったんで、親や親せきは心配していたそうです。給食室近くに落ちちゃったそうです。それで結構問題にはなって、今でも宮森小学校が出てくるんですよ。沖縄の宮森小学校にジェット機が落ちたって、そういう所なんですよ。

富田 お父さんは米軍基地の中でお仕事をされてたんですね。

泉川 修繕員みたいな感じで、それなんで自分のうちを建てたりとか、そういうのは長けてましたね。定年になったのが私が高校の頃ぐらいで、解雇されたんですよ。沖縄が本土復帰して、ビーチや遊び場所が少なくなって、民間に返還されたりで、どんどん米軍も本国に帰って。そういう時期だったんで、うちの父親も解雇されたということですね。それから職がなくて、民間の大工の仕事

をやってたっていう感じですね。

富田 お父さんが沖縄の本土復帰後、米軍関係の仕事がなくなってしまった、で、民間で働きだしたっていうようなタイミングも、先ほどお話しした泉川さんの高校以降の就職先というか、進学先とかっていうところに、多少の影響があったのでしょうか。

泉川 そうですね。本当は先生になりたかった。体育の先生になって、子どもたちに体育を通じて、またその生徒たちが先生に憧れていけるような職業に就きたいと思っていました。その際、野球部の監督にも憧れていました。でも、やはり大学行くのにもお金が必要だし、全てお金なんで、そこは諦めて。あの当時大学行ってそんなにいなかったですよ。みんな高校まで、高校まで行けば、あとは就職してっていう感じで、ほとんど就職してましたね。

富田 自衛隊入隊が、三和シャッターのほうで野球続けると思ってたところにあったってという話で、特に何らかの抵抗というか、単純に自衛隊っていても、日常ではそこまで触れる機会のない環境だったりすると思うんで、不安とかはなかったですか。

泉川 高校の3年のときに、先生とお別れ会をやったときに、先生に自衛隊に行くんだっていう話をしたら、あんまり、いい顔はしなかった記憶はあります。やはり沖教組（沖縄教職員組合）の人たちって、「教え子を再び戦火に送り出さない」という、なんか自衛隊は戦争を巻き起こすイメージがあったと思います。

私自身も学生のころ反対してたんですよ。自衛隊は戦争を起こす組織で反対だ、沖縄から出ていけとかそういう感じでした。でも実際に入隊して感じたことは、国を守るための自衛隊の組織の在り方っていうのを分かってなくて、ただ戦争を起

こす集団だということしかなかったんですね、なんて自分って視野の狭い考えしかもっていないのか？反省しています。自衛隊っていうのは他国からは軍隊としてみっていますが、国内では「専守防衛」自衛のための組織である。なんかあった場合（有事）には国を守るような組織なんだなっていうことを新隊員教育隊で教えてもらったりとか、そういうところで自衛隊に入ってよかったなという感じはしましたね。

だから、自信持って自衛隊の制服着ながら。地元沖縄でオリンピックの壮行会に参加したりしていました。自衛官でオリンピックに出場する形になればPRにもなるし。

最初のうちは、帰るにも飛行場で着替えて、制服で帰って、制服をトイレで私服に着替えて。それぐらい自衛官というのは沖縄県民からは白い目で見られた時代でした。そんな状況があったので、あまり制服では帰らなかったっていうのはありましたね。

2. 野球少年と野球のメッカ「石川」

富田 小学校の頃から運動神経は良かったですか。

泉川 運動神経がいいとは思いませんが、何でも見たらまねてできるような感じでした。突出したことはないんだけど、何でも無難にこなせるような感じで。自分では自分なりにやってなくても見ただけで、こんなふうやってるんだなって分析して体を動かすことはできたんだと思います。

私よりうちの2番目のほうが運動神経は、神経っていうか能力は良かったかなというところはあるんだけど、でも続かなかった。継続してやるっていうことができない性格だったのかなって。私はこつこつ、何でもこつこつやっていけばいいのかなっていうふうな感じでやってたんで、そんなに飽きもせず、ずっと。優柔不断なところもあるんだけど、意外とやるときにはこつこつやってた

ような感じですかね。

体育の授業は好きだったんで、科目の中では一番体育が突出してましたね、走るとかいろいろなので確かに目立ったのは目立ったんだけど、担任の先生がバレーボールの指導をしていて、よその小学校の子たちと試合をやるうということ、選手に選ばれて、バレーボールも小学校5、6年のときからやって、遠征にも行ったことがありますね。たまたま先生に誘われて、行こうって、でも、いろんな経験ができてよかったと感じています。

富田 野球を始めたきっかけをお聞きしてもいいですか。

泉川 たまたま近所にいた仲間たちとまずは一番取っ掛かりやすいキャッチボールを、キャッチボールができれば三角ベースボール。さらに、小学校の頃から少年野球の地区大会があって、大きくなれば全島大会とか、そういうふうには少年野球がかなり盛んに行われてた地区でしたので、10人いたら9人ぐらいは野球やってるっていうぐらいの沖縄県だったんですね。

富田 少年野球のチーム、何か入団されたんですか。

泉川 そうですね。私が住んでいたところには区があって、1区から9区、この区の中でもかなり熾烈な優勝争いもするぐらい野球人口が多かったです。その中で、私は9区で、ファーストでやりました。そのときは野球そんなにうまくはなかったんですけどみんなも、こいつあんまりうまくなかったけど、よく甲子園まで行ったなみたいな。結局、継続してやれたっていうことでそこまで行けたんだなって。うまい子はみんなやめていってしまっ。やっていけばうまくなったのにと思うんだけど、結局、継続することができなかったんだなって、他にやりたいことがあったのかもしれない、私には野球しかないっていうか、野球を

続けておけばなんか自分にプラスになるんじゃないかって思っていました。一番手っ取り早いのが野球だったんで。石川中学校に入学してからは部活の野球で、軟式野球でした。そこでもレギュラーなんだけど、体の線が細くて、そんなに飛距離もないし、鳴かず飛ばず、どこでもできる選手で何にも目立つところはないんで、ただやってたなっていうような感じでした。結構メンバーは多かったです。中学校の頃の野球やった試合の思い出なんていうのはあんまりないですね。高校も、優勝するときの場面とかは思い出すんですけど、他はあんまりぱっとするような感じじゃなかったんで。ただ、練習よりも自分で自主トレしたことの方がすごい記憶に残ってるんだよね。練習始まる前にランニングしてたり、終わった後にランニングでうちに帰ったりとか、練習だけじゃないアフターのところを自分で、お金がないからバス賃がもったいないから走っていこうとか、歩いていこうとか、そういうところで少し切り詰めながらやってたのが意外と体を鍛えられたかなっていう。中学校までは本当に線が細くて形できてるとか、この子はうまいなっていうそういう感じじゃなかったですね。

富田 石川高校に進学したのも、地元の高校だからが一番大きかったのでしょうか。

泉川 そうですね。あんまり遠くにも行かないで。歩いて3キロぐらいかな。海の近くに中学校があって、高台に高校がありました。自宅が中学と高校のちょうど中間地点なんですよね。それと面接やった先生がたまたま野球部の監督だったんですよ。私はそういうところで恵まれて。「君は高校に入っても野球続けるか」って聞かれて、即答で「はい、野球は続けます」って、で、もう先生は丸を付けていただいたかもしれませんね。そういう感じだったんだと思います。所々で分岐点があるんだけど、そこで必ず知ってる方がいるんですよ。その人が救ってくれてるんじゃないかなっ

て。今までもずっと見てると、このときはあの人がいたな、このときはこの人がいて、ちゃんと自分を誘導してくれたような気がします。お助け船がちゃんと面接官でいたんでね。面白いですよ。

富田 中学校から高校になると同じ野球でも軟式から硬式に変わるじゃないですか。当時の高校は木バットですか。

泉川 そう、木バット。ただ高校2年のときに金属製に変わりました。私は高校2年のときには、レギュラーで、7番でショートをやっていたんですよ。チームの中じゃ走るのが多少速くミート力も取りあえずあったんで、あとは飛距離がなかったんですが。

そしたら、監督が体育の先生で、砂場がないから砂場を掘ろうって砂場掘りの作業やらせてもらったんですよ。それが延々と続いて・・・！それが功を奏してパワー付いちゃっていたのかも、そしたら打った瞬間にバーンって飛んで、何気に筋トレやっていたんだなって感じでした。

先生に言われて「おい、泉川、あそこに砂場掘ってこい」って、なんで俺がこんなことしなくちゃいけないんだろうと思ったけど、でもやってるうちにすごいパワーが付いちゃって、見る見る筋トレやってるような感じになって、足腰鍛えられて、腕が鍛えられて。それで、じゃあバッティングしてみようっついたら、最初、1年生の頃は内野も越えないぐらいの貧打だったんですけど、それが外野まで飛ぶようになってきて、これはすごい効果あるんだなと思って。結果「嬉しかった」ですね。その先生は若いので仕事をしつつ職員野球みたいなのをやりながら我々に野球を教えてたんです。背はちっちゃいけど、ずんぐりむっくりしたような、ドカベンみたいな感じの先生でしたね。

自分がそういうふうには砂場掘りをやらされたってことは、この選手は力がないから、もっとパワー付けさせるためにやらせたかもしれない。他の選手は分かんないけど、私はそういうふうには

すぐ。文句は言わないで、何だって思いながらもちゃんと砂場掘ってました。

こいつは足が速いし、使えるんじゃないかなと思って、砂場掘りをやらせて筋トレさせようみたいな。当時、ダンベルとかそんなのはあんまりなかったんで、自然の筋トレを勧められたのかなって感じはしましたね。効果ありますね、あれは。

富田 石川高校は、泉川さんが3年生のときに甲子園に出場しますが、泉川さんご入学される以前のイメージって言ったらいいんですかね、野球強いつていうようなイメージってありましたか。

泉川 石川高校というか、石川は野球のメッカなんですよ。そもそも石川中学校が、全島大会の開会式も決勝戦もやる中学校だったんで。だから、私もその環境の中において野球って面白いと感じたんで、だから継続して野球やっていこうと。スターですよ。学校の中で野球で活躍するとスターになれるみたいな。これはやる価値があるなと思って。あんな華やかなところでいい結果を残すと、みんなからヒーロー扱いされて、やっぱり憧れるじゃないですか。いいな、あの選手、あのバッティング、あの守備。見ると自分もそんな選手になりたいっていうふうになって、その分努力するようになるじゃないですか。そういう憧れる選手を目指して頑張っていけばって。

で、甲子園っていうのを意識したのが、高校に入ってから、特に私の同世代には銚子商業の篠塚さん³⁾がいました。土屋⁴⁾、篠塚って、土屋さんが3年のときに篠塚さんは1年生なんですよ。ある時、銚子商業が親善試合で沖縄に来たんですよ、興南高校とかと。見たときに、え？あれ俺と同級生なんだと思って、篠塚ってすごいなって。私とそんなに体形変わんないけど、あのとき65キロで、180近くあったのかな。確かに上背はあったけど、ちょっと華奢な感じで。それでもやっぱりセンスがいいんですよ。右投げ左打ちで。こう

いう人がプロ野球選手になるんだなと思いつながら、ライバル的な目でみましたね。あのときに、この選手みたいに、1年生から出て頑張りたいなと思っていました。ただ石川高校は私の先輩も、その上の先輩たちの数年前までは1、2回戦で負けたり、そんなに強くはなかったんです。そんな中、甲子園に行けそうなエースが石川高校に入ってきたんで、糸数勝彦⁵⁾と言います。これは行かないといけないし、行けるってみんなが思ったんで、それを合言葉にしました。彼は興南高校に誘われてたんですよ、そのエースが、興南高校なんかは特に集めていたと思います。だから興南高校はいつも甲子園行ってるんだけど。

それでエースがこっちに来て興南をやっつけたもんだから、石川高校が、優勝候補にあがってきたと思います。やっぱりエースが大事だな、エースってすごい重要なんだなって。野球はほとんどピッチャーが良ければって優勝圏内入ると実証しましたよ。その代わりに、1点も取らないと勝てない。だから、今度は打撃でどんどん取ってあげてピッチャーを楽にしようじゃないかという形の野球スタイルにして練習に励んでいました。選抜では豊見城に負けたんですよ。沖縄で優勝すれば、九州大会、九州の代表になれるんですけど、たまたまそのときに1対3で負けたんですよ、うちが1点で。その1点はたまたま私の三遊間のヒットで1点取ったんだけど、あとで3点やられちゃって、結局、返せなかったんですよ。それで結局、春の大会に出場できなくて。

その前の年にも、今度は南九州大会⁶⁾っていうのがあって、高鍋、延岡が来たんですよ。で、石川と興南が沖縄代表、興南は負けちゃって、高鍋が優勝候補だったんだけど、高鍋はうちが、今度は逆に3対1で勝っちゃった。優勝候補だから、これでいけると思ったら今度は興南高校を破った延岡に負けちゃったんですよ。1対3で負けちゃって、結局、準優勝だった。

で、次の年、選抜は豊見城に負けて準優勝。で、夏になって、今度は豊見城が準決勝で負けたんで

すよ。コザ高校の技巧派の左ピッチャーにのりりくらしでやられちゃって。豊見城と対戦したら、多分、相性悪かったんで甲子園行けなかったかもしれない。豊見城が目前で負けちゃったもんだから、私の中ではもう決まりだと。これはもう甲子園行ける。難敵の豊見城も負けたんだから。

あと、コザ高校っていうのは練習試合を結構やってたんで、あのピッチャーねって。でも、いざ決勝戦やったら、中々打ち崩せず、0対0ですずと行ったんですよ。そしたら雷が鳴ったんですよ。それで、この試合は延期にしますって、再試合になって、今度は大量、7、8点、ホームラン1本、と得点することが出来て、向こうは9回表に1点を取るのが精いっぱい、打ちたい放題に打って圧倒的に勝って、優勝して、で、甲子園に行ったんで。決勝戦を2回もやったんですよ。

1回目はやばいと、このピッチャーにやられちゃうと。のりりくらし、豊見城がやられたように。コザは乗ってたんですよ。優勝候補の豊見城高校を下し、石川高校も全然打てる気がしなかった雰囲気でした。いつもの感じと違って全部打ち取られて、そういうふうだったんで。それが雷があって、よかった、これは流れを変えてくれたなって、あのまま試合が続行されたら、ちょっとやばい。今でも思い出すと、あのときよかったな、雷に助けられたって。人生ってこんなもんだなって。いいときもあれば悪いときもある。けど、その時は神様に助けていただいた感じがしました。

富田 甲子園が決まったときは、石川の町は大騒ぎだったんじゃないですか。

泉川 大騒ぎですね。酒飲めれば一番よかったんだけど、あの当時は高校生だからそんなことはできないけど。コーラかジュースで、喉渴いてたから、沖縄の夏だから、かーって飲んで。

自分以上に家族とか周りの人たちがうれしくてうれしくて、帰ってきたら、おおって、みんなから激励されて、よかったなって。あれは今でも忘

れないですね。あの地元の盛り上がりようは。

3. 高3の夏、甲子園と・・・

富田 実際、いざ甲子園どうでしたか。沖縄で優勝して、行くぞって

泉川 最初着いた大阪の空港、沖縄より暑いなと思いましたね。蒸し暑いっていうか、こんな暑い所じゃ、沖縄のほうが逆に、からっとしてる。それが下から蒸されて、あれでちょっと自分も体調崩しちゃったんですね。しばらくぼうっとしたような感じで。

1回戦目は逆転で勝ったんですけど、そのとき、私は1番でショートでした。まずは出塁することを考えました。私は5打数2安打で二塁打と三塁打を打ってるんですよ。点数を取るきっかけになったのが、私の三塁打があって、次の2番バッターが三塁打で、その三塁打を打った2番バッターも次のバッターが本塁に向かい入れて2点取って、同点となり、6回の表にバッターが出たときに、ワンアウトで監督がランナーを一塁から二塁に送ったんですよ。

で、次、私なんで、そこで、私が当たってるから多分監督は送らせたのだと思います。9番バッターに送りバントのサインを出し、二塁へ進め、私に打順が回ってきました。残念ながらショートゴロのちょっと速い打球で、自分ではやったと思っていました。しかし、ショートの正面。ダメかと思い一塁ベースを駆け抜けました。そしたらショートが取って焦ったのか悪送球しちゃったんです。それが3点目となりました。最終的に4対3で逃げ切ったんですけどね。

甲子園で初めて校歌を聞きながら、なんかいいなって感じがしましたね。1回戦目の開会式終わって3試合目でした。すごく良かったですね。ただ、開会式の1回戦目が終わったら、今度は12～13日ぐらい待つんですよ。長かった。その中でちょっと体調崩しちゃって。練習中に膝に

ボールが当たっちゃって、それでちょっと水抜きをして、膝が曲がらない状況だったけど、何とか試合には出れるようにしていただきました。ということで出たんですけど、やっぱり、あんまり体調良くない状況だったんで、自分としては満足できない試合でした。チームも最後、9回裏にサヨナラ逆転ホームラン打たれて負けたんです。やっぱり試合って最後の最後まで分かんないなと感じました。この試合で「何事も最後まで諦めてはいけない。」と言う教訓を得ました。

近代五種協会の事務局長が浜松商業出身なんです。事務局長は、そのとき2年生で。母校の応援をしていたとき、石川高校を知ったそうです。

私がかたま学連の近代五種選手と一緒に泳いで休憩中に、私は石川高校だ、私は浜松商業だって、雑談をしていたときに甲子園でのことが思い浮かびました。あのときのあなたですか、そうだよって、そういう話になって、今でもあのときの話をよくします。まさかこんな近くに浜松商業の1年後輩と一緒に近代五種をするなんて想像もしてませんでした。

その方は日体大の出身なんで、日体大の水泳部で、たまたま近代五種の練習に自衛隊のほうに来たときに一緒に泳いで休憩中にそういう話になって。「そうですか、私見てました、あの試合」って。

富田 甲子園には沖縄から応援が来たりしたんでしょうか。

泉川 そうですね。応援団と、学校で行きたい人って募って、来て。そこから旅行する人もいるし。

で、私の姉が当時たまたま大阪にいたんで、まさか父親も来るとは思ってなかった。お金がないから来ないだろうと思ってたら姉が呼んでくれて、姉（次女と三女）が内地だからって呼んで、父親と弟たちも呼んでくれて、応援しに来てくれましたよ。こんな所で会うなんてって、自分だけかと思ったのに。そういう、家族で一つのイベントに参加できたっていうことがあって、すごく良

かったなと思います。

富田 甲子園の砂は集めましたか。

泉川 集めました。今も自宅に置いてあります。記念に乾いて砂になっていますが大切に取って保管してます。高校野球の聖地に来て、何か記念に持って帰るものないかなと思ったら、一番手っ取り早いので、我々の時は靴袋みたいな、シューズケースにちょっと入れたり、そんなに大量には持っていかないんですけど、記念だからある程度このぐらいでいいだろうって。

でも、今見たら、さらさらの砂みたいな感じ。固めた所とさらさらって。その下までは削らなかった。そうっと集めるだけ。これ、砂じゃないの？って思うぐらい。

スライディングしたときに気持ちいいね。スライディングしたら痛くもなくすーっとする。これがスライディングっていうやつだって、普通のグラウンドだとぴっと止まる感じがしましたが、さすがに甲子園球場という感じでした。

しかし、それがだんだんと回が進むにつれて塁間をランナー走ったり止まったりして蹴るじゃないですか、それでこぼこができるんですね。私の場合、やっと来たと思って、ぱっと取ろうと思ったら、ポーンと跳ねちゃって、(イレギュラー) しちゃって、それで点数、2点取られたりとか。ショートゴロだと思って、よしと思ったら、目の前でポコーンと跳ね上がっちゃって。こういうことがあるんですよね。土のグラウンドは。

勝利の女神っていうのはどこに微笑むか本当にわかりません。ああいう場面で浜松商業に微笑んだのかもしれないね。それなので最低限自分の守備範囲は念入りにならしたかないといけないなと感じました。

試合が終わってから、2、3日ぐらいいて、せっかく大阪に来たから観光旅行でもしようかということで、多分そういう予定も甲子園出場のご褒美で組んでもらっていたと思います。そのあと、沖

繩に帰りました。帰ってまだ甲子園で試合が行われていましたので、何か夢のような出来事に思いました。テレビを見て「そういえばあの場所で試合をしてきたんだよな」って。

富田 甲子園終わって引退ですよね、野球の練習には、顔を出さないようになりましたか。

泉川 私はそれ以降がまた面白かったんですよ。体操部の練習に参加したり。

富田 え？

泉川 体操部の練習に。

富田 野球は行かずに体操の練習に。

泉川 体操でちょっと体を、バック転したりとか、鉄棒の練習したりとか。

富田 それはまたどういう経緯で。

泉川 私、一番最初に話したようにとにかく何でもやると。何でもやって、こなして、自分の体を自由に動かせるようにしたいなと。柔道は小学生の頃に警察署でやってる柔道教室に参加して、受け身とかそういうのも教えてもらったり、あと、空手も少し、型だけやったりとかはしてるんで。本当にそれは型だけですけれどね。そんなに長くやるっていう感じじゃなくて、一通りの型だけ教えてもらって。段とかはなくて経験だけで。

柔道は柔道でちょっと興味があったんで、受け身だけでもと思って。投げられてばかりだったので、受け身は得意でした。学校の授業でも柔道はあったんですけど、受け身ができてればそんなにけがすることねえなと思って、柔道やってよかったなと思って。自分の体形からして柔道っていう感じじゃないから。やっぱり体形に合った競技があるじゃないですか。だからそれを見つける

のも一つだなど。自分には柔道向いてない、いくら頑張っても柔道には向いてないなと思ったり。

球技でも格闘系の球技があるじゃないですか、ラグビーだとか。そういうふうにおつかり合うのがちょっと苦手なところもあったんで、やることはやるけど、あんまり自分から好んではやりませんでしたね。けがするようなもんじゃないですか。こんなタックルされて。ああいうのは向いてないなど。だから、なるべくネット越しのバレーだとかテニスだとかバドミントンだとか。サッカーもやってはいたんですけど、やっぱりサッカーもどっちかっていうとおつかったり。ああいうコンタクト競技ってあんまり向いてないなっていう。お互いにおつかったらはじかれちゃう。そういうときは本当に体幹をしっかりしておかないといけないし。

富田 それは高校ぐらいのときに、何となくそういう感じにですか。

泉川 そうですね。高校のとき、授業のときとかに。

富田 体育の授業とかでサッカーやるぞとか、ラグビーやるぞってなると、ちょっとコンタクト系は、嫌いじゃないけど。

泉川 やるけど、そんなに熱を入れてやってない。

富田 そういった考えの中で、対戦するわけでもないし、かつ自分の体の動かし方を、手足の隅々まで考えないといけないっていう意味でも体操を。

泉川 そうですね。体操部の仲間に、ちょっと練習させてっていうことで体験みたいな感じですね。マット運動をしたり、鉄棒を使ったりとか。同級生がいて、ちょっとやらせてくれる？って。あと、バドミントンもやらせてもらったり。バ

レー、バドミントン、体操。確かにサッカーはそんなにやってない。あとは陸上部にも、ちょっと走りたいなと思って。

富田 野球が一段落して、あんまり積極的に野球できなくなっちゃう時期になったっていうのもあったけど、やっぱり体は動かしたいなっていうので。

泉川 そうですね。卒業するまでは、できればそこに行って体を動かしたいかなと。それも生きて、自衛隊に行っても、そのまますんなり。

4. 自衛隊入隊

富田 先ほどの三和シヤッターの話は具体的に高校3年生のいつ頃ぐらいなんですか。

泉川 三和シヤッターは、甲子園行った後ですね。就職するか進学するかで話し合ったときに、近くに工場ができてるし、その会社どう？って。沖縄にいたほうが父親の面倒も見れるかなという感じはしたんですけど。年内ぐらいの話ですかね。

富田 三和シヤッターで働きながら野球することを考えていた中で、いつ自衛隊のお話が出てきたのでしょうか。

泉川 自衛隊は3月入隊だったんで、1月、2月頃に自衛隊の試験を受けました。その時期、高校3年生は冬休みというか就職休みなんですよ。友人と遊んで、話が出て会うことになって、実際に会って話をしたら、じゃあうちに来なさいと、行った次の日に、私、今度、迎えに来るから、今度は試験をと、個人的にですけど、試験を受けました。団体試験は終わってて、結局、入隊枠に空白ができたんですよ。あと何人か。要は、何人かが不合格になったんで空いてるところがあって、たまたま誘われたんで受けてみました。受け

たら大丈夫ですよってという感じで、決まったんだったらいっそのこと行こうかということで入ったんですけどね。

再募集で誘われたって感じですね。試験の内容は、筆記試験と身体検査と面接でした。自衛隊の入隊試験をやってしっかりと入りました。合格通知はいつ頃だったかな。入隊するのが3月26日なんですよ。その前には決まっていたんで、学校の卒業式前にはもう決まっていたような。父親にも話しました。入隊して、3カ月間は鹿児島なんですよ。前期教育が、で、終わって、いったん沖縄に帰ってきて、今度は後期教育っていうのがあるんですね。前期教育が鹿児島3カ月、後期教育が北海道の倶知安で3カ月。3カ月終わったときに中隊に配属、本採用っていうか部隊配属になって、そこからずっと第4中隊という所で勤務をして。翌年に集合訓練ということで、自衛隊体育学校の課程教育に「特別体育学生集合訓練」に参加いたしました。本当だったら、ここで(北海道倶知安駐屯地)ずっと6年ぐらいは勤務しなくちゃいけなかったんですけども、あの当時はロシア(旧ソ連)が、よく注意してくださいよっていう。昔、ソ連のビクトル・イワノビチ・ベレンコ中尉が当時最新鋭のミグ25で領空侵犯し北海道函館空港へ飛来。強制着陸を開始しオーバーランして止まった。あのときちょうど新隊員なんですよ。だからびっくりして。先輩が「函館空港にソ連のジェット機が不時着したんだぞ」って。それで、もう戦争始まるんじゃないかって大騒ぎしまして、みんな待機したんだよね。そういう時代だったんで、ちょっとやばいなど。

だから、北方重視であの当時に九州から北海道に。北海道勤務すれば、だんだん沖縄に帰ってこれるかなっていう思いはありました。

同期入隊は500人ぐらいいたかな。九州地区陸上自衛隊国分駐屯地第113教育大隊ですね。ほとんど。沖縄、鹿児島、宮崎とか。私は国分でした。国分駐屯地。「花は霧島」って鹿児島おはら節、教育隊終了前に、養護老人ホームに慰問に出かけ

て歌や寸劇をして披露したことがありますよ。ホームの皆さんが喜んでくれて、私も初めてのことで参加してよかったなーと思いました。今でもその時のことを思い出すことがあります。

国分での3か月間は自衛官としての基礎教育でした。自衛官としての体力面、それから基礎的な国防の重要性だとか、個人の充実、団結の強化などのいろんな精神教育をやって、自衛官に必要なものの教育をして、あと、射撃の基本とか、自衛官としての基本を教育する所ですかね。

で、後期は職種の教育。私は普通科だったんで、軽火器(歩兵)の所ですね。小銃とか機関銃とかそういう感じの部隊で。

富田 小銃を何かに向けて、しかも実弾を撃つって初めての経験ですよ。

泉川 そうですね。これ(実弾)に当たったら相当なことになるんだろうなっていう。景況を見たりとかすると、これはやっちゃいけないなど。一番、だから自衛隊は武器を扱ってるんで、戦争はしっちゃいけないんだということは思ってますね。遊び半分じゃなくて、実際に実弾を撃ってるんで、これが当たったらひとたまりもないなということを経験してるんで、だから逆に、われわれのほうに絶対戦争しっちゃいけないし怖さを知っている。これはあくまでも家族や仲間(国民)を守るためにやるための手段であって、それを最初から使おうっていう、そんなことはない。万が一他国から侵略され場合に使用する可能性はあると思います。

銃の扱いで、人に向けちゃいけないよと。この銃口は絶対に標的のほうに向けなさいよとか、安全装置の掛け方とか、そういう、本当にこういうところからやっていかないと。

数年前乱射事件とかあったんで、それを後ろに向けて、ダダダッて撃って、罰になったこともあるんで、そういうことをしっちゃいけないから、射撃係とか安全係とかいろんな係が付いて、もし銃

口がこっちを向いたら、速やかに制するとか、安全装置で弾を抜いたりとか、そういうふうなところもしっかり見ときなさい、そういう教育をやってるんで。絶対に人に向けさせない。当たり前のことですよね。

富田 実際、入隊されてどうでしたか。入隊された後のモチベーションというのは、

泉川 ずっとやる仕事じゃないなというところもありましたね。基礎教育をやって、本当に自分がやりたい仕事があったらいつでも辞めていいかなって感じはしました。でも、たまたま自衛隊体育学校に入校ができたので、同じ自衛官でもこういう仕事もあるんだなと思って。また興味のところが全然違ってきたわけですね。

そしたら、現役選手のところにバブルが来たんですよね。バブルが来たときに、辞めて民間企業のほうがもうかるんじゃないかなとちょっと思ったんですけど、でも、今、ちょうど競技が波に乗ってるところで辞めてしまったら、せっかくここまでやってきたのっていうことで辞めずにいたら、今度はバブルがはじけちゃって。辞めた人たちはあそこで辞めなきゃよかったというふうなことも聞くわけですよ。そういうタイミングがあるんですよ。やっぱりあのときに頑張ってたかなーということは思いました。

5. 自衛隊体育学校入隊へ

富田 自衛隊体育学校入る前の期間、まずは初年次教育みたいなところがメインだったと思うんですけど、実際、この期間も、例えばレクリエーションで運動とかスポーツとか、そういう機会はありましたか。

泉川 ありますね。そこで目立ちますね。バレーボール大会、ソフトボール大会、持続走競技会、大体、若いときは体育会系のほうがすごい目立つ

など。あっちこっちですごく目立ったんで、あいつはすごいっていうふうになれば、自然と体育学校行ったほうがいいよとか、勧めてくれますね。

富田 500人でしたっけ、同期というか、最初、一緒に教育を受けた。大卒もいらっしゃるんですか。それと高校までで何かスポーツでキャリアを持っていた人もいらしたんですか。

泉川 大卒はまだ少なかったと思います。あの当時、うちの中隊で2人ということは10人いるかいないかぐらいかな。ほとんど高卒でした。スポーツ経験者もいました。体操の選手、インターハイだとかなんかに出た。その隊員にも体育学校に行った方がいいなんて話が出ていましてね。その人の話に私が耳を傾けてたんですよ。最初、班長たちが、彼はインターハイにも出てる体操の選手なんだよって。体操の選手は、第1教育課って体育指導者のことができる課程があるから、そこに行ったらいいよって本人に言ってた。でも、もう一つはさっき言ったようにオリンピックを目指す部署があるからって。そこは考えてなかった。たまたま体育学校っていいのはいいな、体育学校で運動できていいなとしか思ってなかったんだけど、まさかそういう部隊に行けるなんて？

種目は、最初、ボクシングで行けと。泉川は体力あるし、顔がちっちゃいし、腕は長いし、じゃあおまえボクシングだとかって、そう勧めてくれた上司はロイヤル小林さんを教えた監督さんだったんですよ。その人に目を付けられて、「泉川君、君、ボクシングやってみないか」って。「いや、ボクシング、殴り合いは大嫌いなんです。私、格闘は大嫌いです」って言って。「そうか、じゃあ分かった、君は泳げるか」、「いや泳げません」、「いいよ、取りあえず近代五種っていう種目があるから行ってこい」って言われたのがその方なんです。私を薦めて、そして3カ月間行ったら採用になっちゃって。

その後には体育学校行ったときに、その方が今度

は体育学校の総務課長で赴任されました。そのときに陸曹になるかならないかっていうときで、陸曹になりたいって言ったら、すぐ一発で陸曹に合格させていただいたのかなー。その際の面接官が総務課長でした。そういうところで、本当にいい方と出会えて、勧められて、で、それから陸曹教育隊でも体力優秀賞をいただいたりして、その後教育を終えて帰ってきた次の年に全日本選手権大会で優勝できたっていう感じなんで、本当にいいタイミングでした。

モスクワオリンピックは選考会参加してないんですよ。当時の私は陸曹教育に参加のため選考には関係なかったのです。モスクワの次のロサンゼルスから自分が本領発揮しないといけないなと思ってたから、ロスとソウル連続で選ばれたんで、やっばこの期間ってすごい大事だったんだなという感じはありましたね。

走り込みましたよ。陸曹教育隊に入校して泳ぎがないから、とにかく銃を持って走ったり、前へって、だーってダッシュして伏せたり、ほふくしたり、そういうことをして、とにかく走り込み。週末になると河口湖マラソンとか、山中湖マラソンとか、そういう近くの所でロードレースがあったりで、それに参加して、走り込んだ感じですね。それで帰ってきたらばんばんに走れるようになって、走りが速くなったなって。高校のときのパワートレーニングと、走り込みと。

富田 すごいですね。先ほど出た鹿児島とか北海道いたときのバレーとかソフトボールとか持久走とかって、学校のイベントとして行われてたものなんですか。

泉川 そうですね。新隊員教育隊のときに、各区隊対抗だとか、何とか対抗って対抗戦があるんですよ。表彰式まであるんですよ、ちゃんと。班対抗だとか、区隊対抗だとか、そういうふうにくつかのグループが分かれて、その中で対抗戦をして、優勝した班や区隊にはノートを渡したりとか、

そういう商品を受けるのが嬉しくて頑張りました。「団結の強化」です。

これが団結の強化っていつて教育の教えにもありました。みんながこのボールに対して、このチームで一つに団結して勝ち進んでいくぞというふうな、みんなで「おい、行くぞ」っていう、それをやるためにはすごく効果のある教育なんで、体育訓練の中にバレーボール大会とか、持続走競技大会、駅伝大会だとか、いろんな教育隊の中で設けるんですよ。

富田 そうすると、やっぱり、泉川さん、おのずからポテンシャルがいかに発揮されていく。

泉川 もともと体を動かすのが好きでしたので、教育隊の時だけでなく転出した地域でも走ったりね。ソフトボール大会でホームラン打ったりしていましたね。活躍した人には商品があったりとか。特に転勤で御殿場に行ったときも、たまたま地区大会の大会に誘われて、ホームラン打って洗剤のバックを何箱もいただいたこともありました。多くいただいたのでご近所さんへ差し上げたこともありました。楽しかったー。こういうところで役立つんだなって思いました。

(続)

文献

- 1) 円谷幸吉 (1940-1968)。福島県岩瀬郡須賀川出身。1964年東京オリンピックではマラソンで3位となり銅メダルを獲得。
- 2) 宇佐美彰朗 (1943-)。新潟県西蒲原郡吉田町出身。1968年メキシコシティオリンピックのマラソンに出場。
- 3) 篠塚和典 (1957-)。内野手。銚子商業高校野球部で2年生の春・夏(1974年)と3年生(1975年)の夏に甲子園出場。1975年のドラフト会議で読売ジャイアンツから1位指名を受けて入団。

- 4) 土屋正勝 (1956-). 投手. 銚子商業高校野球部で2年生の春・夏 (1973年) と3年生の春・夏 (1974年) に甲子園出場. 1974年のドラフト会議で中日ドラゴンズから1位指名を受ける.
- 5) 糸数勝彦 (1958年-). 石川高校のエース投手. 1975年のドラフト会議で太平洋クラブライオンズから2位指名を受ける.

- 6) 一県一代表でなかった時期に開催されていた全国高等学校野球選手権大会南九州大会のこと. 1974年第56回大会まで開催され. 参加県は時期によって異なるが, 1960年に鹿児島が一県一代表参加となって離脱して以降は沖縄と宮崎の高校が参加して実施されていた.

(受理日: 2023年2月24日)